

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



2022年9月23日・24日 国内宣教カンファレンス
※撮影の瞬間だけマスクを外しています

「苦しみにあったことは、私にとって幸せでした。それにより、私はあなたのおきてを学びました。」

作者の信仰には及ばないと思わせる一節です。ただ、このみことばの真意を確認するなら共感できるものがあります。彼が学んだものは、神と関わることそのものです。「主よ。あなたは：良くしてくださいました」（六五節）と、「あなた（神）」そのものを学んでいます。多くの詩篇がバビロン捕囚後に作られたと言われていますが、「苦しみにあったこと」が捕囚体験だとすると、屈辱を味わったその苦しみを幸せとは言えないはず。そうではなくて、学ぶこと自体への感謝を言っているのだから、苦しみそのものを肯定しているわけではありません。その学びも、知的なものに終わらず、神との関わりにおいて新しい意味合いを発見するということもです。「同じようにして御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらいかが分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもってとりなしてくださるのです」（ローマ八章二六節）。御霊がこれほどまでに骨折ってくださいているのは、御父と弱い私たちとの正しい関わりを保ってくださいているのです。神に對して何をどう祈ってよいか分からない、つまり自分一人では神との正しい礼拝関係を保つことができないのが私たちです。私自身、コロナ禍でそのような弱さを見せられた者のひとりですが、冒頭のみことばを以前より理解できるようになりました。大切な御父のみことばを存じである御霊のご愛と熱心に気づき、主のおきてを学びたいものです。

JBBF国内宣教委員会委員長・井口拓志



多治見伝道のスタートは、ビル・ニール宣教師が1977年に伝道を開始された時から始まります。生活の拠点は多治見市内の町屋を借りられてのスタートでした。私は「アメリカ人なのに、こんな使い勝手の悪い住まい大丈夫かな」と案じながらもニール師ご夫妻に敬意を払う思い

多治見セントラルバプテスト教会が開拓伝道を始めてからの歴史は長いのですが、さまざまな変遷を経て現在に至っています。主イエス・キリストは、どのような時でも、御自分の教会を守って来られた証しとなる教会だと思えます。「小さな群れよ、恐れることはありません。あなた方の父は、喜んであなたがたに御国を与えてくださるのです」（ルカの福音書十二章三二節）。約束された主の言葉の確かさを確認させていただいている思いであります。



ある年は2年間、市村伝道師夫婦が招かれて留守を守りました。その後、新しくできた桜ヶ丘に拠点を移され、借家から始められ、その後、教会と御自宅併用の建物を購入されました。開拓時から教会名の改名が何度かなされ、美濃聖書バプテスト教会、多治見聖書バプテスト教会、セントラルバプテスト教会、そして現在は多治見セントラルバプテスト教会に改名されております。桜ヶ丘の時に火災があり、その後、現在の旭ヶ丘にある物件を購入、会堂として用いられているところは、アメリカ



た。4年ごとにファローで米国に帰国される方があり、中部地域のBBFの教会の牧師先生方（私も含めて）が交代で多治見伝道所の講壇を守ることがしばしばありました。



テスト教会のフィリップ師が御言葉の取り次ぎを担当しています。またJBBF総会においては、教会の要請により、上田晃国内宣教師が多治見教会の代議員として登録しております。無牧師状態ですが、大牧者主キリストの膝もとで、教会員は熱い心をもってすべての集会に出席し、御言葉に聞き、御言葉を学び、交わり、これからの伝道ビジョンの実現に備えておられます。尚、ニール夫人は老人ホームに入所しております。ご拝読いただければ幸いです。

カからの建設ボランティアや甲府教会の藤田牧師、ハレルヤ教会の谷井牧師方の協力をいただいで現会堂が完成し、今日に至っております。昨年、台風で屋根が破損。外壁も破損。裏庭の崖の擁壁工事など数百万円をかけて補修工事をいたしました。教会はほとんどお金がなかったのですが、その必要が満たされたのです。ニール師召天后も数人の教会員によって、休みなく礼拝や聖書研究会が守られており、講壇の御用は教会が要請し、現在はNBBC上田晃国内宣教師、岡崎教会協力説教者岩尾章師、カールバリーバプ

開拓基金貸出上限額が100万円 → 150万円になりました

国内宣教委員会では諸教会の開拓伝道の働き推進のため、開拓基金の貸出を行っております。これまでは貸出上限額が100万円でしたが、2022年度より上限額を150万円といたしました。尚、開拓基金は新規に伝道所を出す際だけでなく、不動産の購入や建物の補修などの目的のために用いることもできます。また、開拓伝道所だけでなく、独立教会もご利用いただけますので、入用がございましたら宣教委員会までお問い合わせください。

対象： 国内の開拓伝道所および独立教会
申請： 国内宣教委員白井までメールにてご連絡ください shirai-k@rd5.so-net.ne.jp
方法

献金振込先（郵便振込）
00140・2・6544375
JBBF国内宣教委員会

主の民に属する者は誰か

今回、私は2つのテーマ、2つのテーマ聖句、そして2つの説教の枠を与えていただきました。

① ローマ人への手紙十章十五節

最初に取り上げる御言葉は、ローマ十章十五節のお言葉、「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」です。この御言葉は、イザヤ書五二章七節からの引用です。この五二章七節は、イスラエル人の罪のために神の裁きとしてアッシリヤに虐げられていたイスラエルに対して、回復を宣言する預言です。そして、その回復は、苦難を経験するメシヤによって成し遂げられる。そのことが語られています。

そして、ナホム書一章十五節もまた、同じテーマを扱っています。ナホムもまた、ユダの民に喜べと伝えていきます。それは、神がアッシリヤの虐げを退け、彼らに救いをもたらされるといふ知らせでした。

この3カ所のみことばの共通点は、いづれも「良い知らせ」は暗闇のまっただ中でもたらされるといふことです。そして上記2つの預言者を引用したローマのみ言葉では、今も罪に滅び行く暗い世界の中で、この良い知らせが告げ知らせられる輝きが求められるのです。

② 2テモテへの手紙二章八〜九節
イエス・キリストのことを心に留めていなさい。私が伝える福音によれば、この方は、ダビデの子孫として生まれ、死者の中からよみがえった方です。この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながられています。しかし、神のことばはつながっていません。

福音は状況が最も暗い時にこそ、最も美しく輝くものです。神のことばは、それを縛ろうとするものがある時にこそ、その束縛を克服して勝利するものなのです。この真理は、聖書の歴史にあらゆる場面に観ることが出来ます。



その歴史の一つは、エズラ記に見る、バビロン捕囚からの帰還でした。BC536年頃、ベルシャのキュロス王からとても命が下されます。大帝國バビロンを一夜にして打ち破ったベルシャのキュロス王自身が、バビロン時代に捕囚となっていた30万人以上のユダヤ人たちが暗闇から解放し、エルサレムに帰還する可能性を伝えたのです。

しかし、キュロス王がこのようにユダヤ人に帰還を命じたのは、神ご自身が約束しておられたからです。エレミヤは、二五章十一節、二九章十節で、神ご自身が70年後にエルサレムに捕囚の民を連れ帰ると約束しておられたのです。

2022年 国内宣教カンファレンス

この福音のために

なんと美しいことか
良い知らせを伝える人たちの足は

すずらん聖書バプテスト教会 トニー・エバンズ



JBBFは、以前に増して教会が増えました。しかし、献身者は今まで以上に減っています。しかし、神のことばはつながれていないこと、暗闇の中こそ福音は輝くこと、そのことを神ご自身がご計画しておられることに、私たちは目を留めるべきです。

エズラ記一章三節には「あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神がともにいてくださるよう。その者はユダにあるエルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ」と書かれています。ここで「だれでも主の民に属する者には」と訳されていることは、英語では、「主の民に属する者は誰か?」という呼びかけになっていません。あなたが主の民に属するならば、「エルサレムに上り、イスラエルの神、主の宮を建てるようにせよ」と呼びかけているのです。つまり、あなたが主に属す



る者であるならば、神はあなたにも呼びかけておられるのです。しかし、この神の呼びかけには二つの側面があります。一つは、「主の民に属する者」つまり、信仰を持つ者ならば、立ち上がって、神の仕事をするために出て行くようにとの



呼びかけです。今は、福音を伝える説教者、伝道者が求められています。神のことばはつながれていません。しかし、神の民は、つながれていないでしょうか。ローマ十三章十一節にあるように

「今は救いもつと私たちに近づいていません。眠っている時ではありません。今こそ、行くべきなのです。確かに暗闇が覆っています。しかし、だからこそ福音が輝くときなのです。出て行くときは今なのです。」

そして神の呼びかけの二つ目は、出て行く人のために、献げ、サポートせよという呼びかけです。エルサレム神殿再建の時、キュロス王は「あとに残る者たちはみな、その者を支援するようにせよ。：銀、金、財貨、家畜をもってその者を支援せよ」と命じました。この支援は、神殿の建築資材や建築費用ではありません。神殿再建に出て行く人自身のための支援でした（再建費用はキュロス王が支払っている三章七節、六章三〜四節）。

そして、一章六節を見ますと「選りすぐりの品々」も献げています。つまり、彼らは自分自身が行くかのように最善のものを献げたのです。すべての人が牧師、宣教師として出て行くわけではありません。しかし、彼らと同じ気持ちで、彼らこそ自分たちの代表者という気持ちで、心から犠牲を払おうとしているでしょうか。「なぜ誰も行かないのか」と言う時に、「なぜ、誰も送らないのか」と答えるべきかもしれません。神のことばは、つながれていません。問われているのは出て行くか、支援するかという違いはあっても、あなた自身がこの言葉を文字通り受け止めるかどうかなのです。



誰がいますか？

第2集会では、エズラ記や同時代の書を通して心に響いてくる5つの質問に思いを向けていきたいと思えます。

質問①「誰が帰りましたか？」

紀元前538年頃、捕囚の地にいた民にエルサレムにおける神殿再建の召集がかかりました（エズラ記一章三節）。この召集は一部の技術者だけに与えられたものではなく、「主の民に属するすべての者（全イスラエル）」が対象でした。最初にこの命令に応えたのはゼルバベルでした（二章二節）。ゼルバベルはユダの総督となりました（ハガイ書一章一節）。次に大祭司の役割を担うヨシユアが召集に応えました（ハガイ書一章十二節）。エズラ記二章二節ではゼルバベルとヨシユアの後に9人の名前が続きます。11人のリーダーたちのチームが編成されました。

ゼルバベルとともに帰還したのは約5万人でした（二章六四〜六五節）。半数（23309人）は特別な資格・役職を持たない人々でしたが（二章三〜三五節）、彼らはバビロンでの安定した生活を捨てて、神に

従うことを選んだ者たちでした。

質問②「レビ人(献身者)はどれくらいいますか？」

エズラ記二章三六節からは神殿で仕える祭司とレビ人について言及されています。この時に帰還した祭司は4289人でしたが、レビ人は341名しかいませんでした（二章三六〜四一節）。エズラ記八章に記されているエズラの指導による第2回目の帰還時、レビ人はさらに消極的でした。2回目の帰還時に祖国に旅立った人々の合計数は1496人で



したが（八章二〜十四節）、最初の召集に応えたレビ人はひとりもいませんでした（八章十五節）。レビ人は神殿の世話係ですから、神殿再建を一番喜ぶ人々であるはずですが、しかし最初の召集時にレビ人を見つけたことはできませんでした。レビ族は「主が財産」である故に祖国に土地がありませんでした。神殿における仕事は祭司とは異なり、華やかな仕事ではありませんでした（動物の世話・掃除等）。しかしレビ人こそ神殿を身近に覚え、再建のために帰るべき人々でした。神殿再建のためにレビ人がいない状況は、クリスチャンホームからの献身者がいない現状に似ているかもしれません。レビ人を召集するために、11人の者たちがやつ

てきました（八章十六〜十九節）。イドは最初の召集に応えられなかったことに罪悪感を感じたことでしょうか。捕囚の地での生活を捨てることには犠牲が伴いました。住み慣れた家や畑を離れて破壊された町に行くのです。子どもや動物と1500キロの旅をする必要があります。周辺諸国の反発の噂も伝わっていました。しかしこの時の召集には38人が応えました。少ない人数でしたが追加召集はありませんでした。どれだけ大勢集まったかよりも、集まった人々を通して神がどのような働きをなさるのが大切ですか。少ない人数でも神には大きな働きができるからですか。



質問③「今はそのようなことをしている時ですか？」

帰還後にゼルバベルが最初にしたことは祭壇でいけにえをささげることでした（三章一〜二節）。動機は「敵を恐れたから」と記されています（三章三節）。敵を恐れるのならまず城壁を再建するべきであると考えるのが一般的です。しかし、敵から守られるために必要であるのは城壁よりも神との関係です。また、私たちが何よりも優先すべきことは自分を守ることも神を礼拝することなのです。

祭壇を築いた後、工事が始まり土台ができました。しかしその後、様々な問題が起こり工事は中断されました。次第に民は神殿ではなく自分た



ちの家に関心を持つようになってきました。その状況にあって遣わされたのが預言者ハガイでした（五章一節）。ハガイはこの世のことに思いが集中して、神の働きをないがしろにしてしまっていた民に神のしもべとしての自覚を促しました（ハガイ一章一〜十一節）。民は悔い改めて神殿建設は再開され、4年程で完成しました（ハガイ一章十二〜十五節）。神の言葉は縛られていますか？暖かな説教は暖かな効果を生み出しますが、はつきりした説教は人の心に響くのです。

質問④「あなたは特別なご計画のために召されていますか？」

神殿は完成しましたが、神の敵は

質問⑤「神の働きが完成されていないのに、ご自分の満足できますか？」

諦めませんでした。神の民を破滅させようとしてハマンという人の心に働きかけました。サタンは別の角度から攻撃を開始したのです。しかし神はその攻撃が実行される前にエステルを所定の位置に配置しました。エステルは、最初は恐れましたが、モデルカイの質問を通して立ち上がりました。「あなたはこの時のためにここにいるではありませんか？神の特別な計画に応えませんか？」（エステル記四章十二〜十四節）。

神は常に必要な人材を必要な場所に配置し、必要な賜物を整えておられます。ネヘミヤも王の側にいて用いられた人物でした。ネヘミヤはエルサレムの城壁がまだ修理されていないことを憂っていました（ネヘミヤ記二章一〜三節）。ネヘミヤは満足していませんでした。神の仕事が完成されていないのに、なぜ私たちは満足できるのでしょうか？すべての造られた者に福音を伝えるまで、なぜ満足できるのでしょうか？ネヘミヤは王の前で証しをして、城壁再建の許可と予算をもらうことができました。

誰がいますか？献身者はどこですか？今は何をすべき時ですか？特別なご計画のために召されてはいませんか？神の仕事が完成されていないのに満足できますか？お応えしますか？



国内宣教カンファレンス参加者証し

掛川聖書バプテスト教会 ニコラス・レイ

今回の国内宣教カンファレンスにおけるエバンズ先生のメッセージを通して、クリスチャンの中には二つのタイプのクリスチャンがいて、それは「行く人」と「行く人を応援する人」であるというメッセージを聞かせて頂きました。私はどちらに当てるはまるか改めて考えるようになりました。

私は17歳の時に日本へ来ました。クリスチャンホームで育てられました。19歳で実際にクリスチャンになりました。それ以来、神様は私の人生で予期せぬ素晴らしいものをもたらしてくだ



さいました。例えば、「福音のために日本に留まりたい」という気持ちがある中に現われるとは思いませんでした。クリスチャンになった頃、神様の救いを皆に伝えたくて、神学校へ行きたいという思いもありました。そこに行かなければ、教会が行っている働きに私はあまり役に立たないだろうと思っただけです。

しかし、時が経ち、神様はさまざまな方法でどこにいてもどんな仕事をしていても、私の命を捧げ、他の人が救われるために働くことができますと示してくださいました。ですから、今回のメッセージを通して、何をしても教会の召しから離れずに、仕事や日常生活

で得たものをその働きに捧げることができるということを思い出しました。と言っても、もっと教会の仕事に関わりたい、いつか教会のために、もっとフルタイムの仕事ができればという考えも持っています。与えられた人生の一つ一つのステージで神様のみこころが理解できますようにお祈り頂けると幸いです。

現在のコロナのために集会の開催が難しい状況の中でカンファレンスを主催してくださったことに感謝いたします。また信徒たちも参加させてくださりありがとうございます。他の忠実で強い信仰を持っているクリスチャンと会えたことは大きな祝福でした。



クリスチャンが1%にも満たない日本でもこのようなクリスチャンと会うと非常に励まされ、私が見えないところで神様が働かれていることを再確認できました。



清水聖書バプテスト教会

奥村 夏葉

初めて参加した国内宣教カンファレンスは、エバンズ先生を通して語られたメッセージ、4人の先生方の証、分かち合い、また自然豊かな神学校で過ごした時間の全てが神様からの恵みでした。

今回はこのカンファレンスを通して神様の御心をもっと知ることができたらと思い、期待して参加しました。この二日間の中で教えられたことが3つあります。

一つ目は「主からの召しは十人十色で、個人と主の交わりの中での否定できない程にはっきり思わせられるものである」ということです。私はつい答えを求めてしまいやすい者



です。しかし、主は答えではなく「知恵」を与えてくださると示してくださいています。また、分かち合いの中で主は道を開いてくださる方でもあるけど、違う道であるなら閉ざしてくださいる方でもあると示され、主が日々私に語りかけてくださっている御言葉を聞き逃さないように、毎日のデボーションを大切に、御言葉に夢中になる者でありたいと改めて思われました。

二つ目は「エズラ記一章一〜四節より、クリスチャンの人生は行く人と一切をもって支える人のどちらかである」ということです。

初めは、自分がどちらの道に歩んだら良いのかわかりませんでした。分かち合いや交わりの中で「どちらの道であっても主が導いてくださる道を私は歩んでいきたい。主が導いてくださ



い」という祈りに導かれました。三つ目は「ハガイ書一章四節より、大きな主の働きが待っているのにこの世のことで忙しくするべきなのか」ということです。

主の栄光の為に働く者でありたいと祈り、与えられた訪問看護師ですが、いつの間にか仕事をこなす事に集中してしまっている自分の弱さに気付かされました。この世界が減びに向かっていること、救いを知らない人が教え切れない程いることを改めて思い起こしもう一度今の働きについて考える時間を与えられました。

主はいつでも「だれを、わたしは遣わそう。だが、われわれのために行くだろうか。」と問いかけておられます。私もいつでも「ここに私がおります。私を遣わしてください。」と手を



挙げ続ける者でありたいです。「なんと美しいことか、良い知らせを伝える人たちの足は」ローマ十章十五節。「この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながられています。しかし、神のことはつながれていません」IIテモテ二章九節



国内宣教カンファレンスに出席できたことを主に心から感謝致します。3回の集会でそれぞれ主から教えていただいたことを証させていただきます。

開会集会では、コロナ禍で受け身の信仰になっていくことを聞き、まさに私のことであると思いました。そのようになってしまふのは、ローマ八章二四節の「この望み」を望んでいないからだと思われ、今福音を思い返す時であると主に示されました。

第一集会では、エレミヤ二九節十節の預言をダニエルが70年間ずっと意識しており、神殿の再建が実現したことから、捕囚で人々はつながれていても神のことはつながれないことを教え



られました。「この福音のために私は苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことはつながれていません」(IIテモテ二章九節)。コロナ禍で人の動きが制限されている中でも同じであり、つながれることのない神の約束を待ち望み進む者でありたいと思えました。またエズラ一章三〜四節から、「行くか、一切をもって支えるか」と問われました。神様が大きな働きをしようと願っておられる時、立ち上がって行く人を待つておられる。もし事情があつて行けないのなら、その人は行く人よりも大変で、一切をもって行けるように援助する。どちらも素晴らしい働きであると思えました。私には行けない理由はありませんから、「神様、私は行く者でありたいです」と祈りました。



第二集会では、エズラ記八章より二回目の帰還ではレビ人が一人もおらずユダに帰ることを抵抗していたこと、11人のかしらがイドの元にやってきて召集したことから学びました。40日間の移動、ユダでは近所からの反発がある、土地も財産もない：レビ人が行きたくない状況は明らかです。しかし38人が行きますと答えました。初めの召集では行けなかったけれど二回目で行くべきだと分かったこと、それで十分だと教えていただきました。私も御言葉を通して主に声をかけていただき、神様の呼びかけに応えますと祈りました。またハガイ一章一〜五節より「神の働きが終わっていないのに、今そんなことに自分の全力を尽くすのか」と問われました。この世でいっぱいいっぱい残りを神様に捧げるのは違う、



すべて福音のために行うべきであると教えられました。
二日間、メッセージをはじめ、お証しや分かち合いなどを通して、主が生きて働いておられることを感じる時でした。カンファレンス後、清水は台風の影響で断水がありましたが、礼拝も守られ、主のことはつながれないと目の当たりにできたことも感謝いたします。



立川聖書バプテスト教会

有本 悟

今回、私は伝道師の妻の誘いで国内宣教カンファレンスに参加することにしました。ただ、誘われた当時、正直気乗りはしていませんでした。国内宣教カンファレンスと聞くと、牧師・伝道師の先生方の集会で、そんなすごいところへ一般信徒の私が参加してもと恐れ多くて仕方なかったからです。それでも、伝道師として神さまに仕えることに情熱を注ぐ妻をカンファレンスに参加させてあげたい気持ちがあり、そのためには生後10カ月の子どものお世話が必要で、「行くしかない」、そんな気持ちでカンファレンスの日を迎えました。



カンファレンスの集会では、2日間



に渡り、エヴァンズ先生の力強いメッセージと4人の牧師・伝道師の先生方の救いと献身の証が語られました。集会の後には交わりの時が与えられ、普段は交わることができない他教会の牧師・伝道師の先生方や他教会の兄弟姉妹と交わることができました。その中で、私が恵まれたことは、今、神さまから自分に与えられているご計画(働き)が何かを示されたことです。エヴァンズ先生のメッセージの中で、エズラ記一章三節から、遣わされる者とその者を支援する者の二者しかないというのを聞きました。その後の交わりの中で、私は伝道師の妻の働きを支援する者であることに気付かされました。普段、仕事と育児に追われる生活の中で、神さまから与えられている働きが漠然としてしまっていました。

今回のカンファレンスは、その事に気付かせてくださり、自分に与えられている働きを再確認する機会を与えてくださいました。このことを通して、神さまとの交わりがより豊かにされたことは本当に大きな恵みです。自分に与えられている働きを、喜びをもって全うしたいと願っています。



9月23日(金)・24日(土)台風の影響による雨の中で、国内宣教カンファレンスが行われました。エバンズ先生からの2回のメッセージに加え、グループに分かれての交わりの時には、献身を祈っている兄弟たちの発言に対して、先生方がご自分の経験を証しされるなど、相互の良い関係の中で交わりを持つことができました。今回の目的である「集まるとの霊的交わり」は祈りが答えられました。全員での会衆賛美は行いませんでしたが、代表の先生方に賛美していただき恵まれました。神学校とグレイスキャンプ場の協力があつて、この集いが実現に至ったことをうれしく思います。2日間の感染対策を行い、感染者はありませんでした(帰宅後含む)。

国内宣教委員長 井口 拓志



コロナ禍での教会の祝福

2年前の2020年教会として掲げた年間聖句は、イザヤ書四三章十九節でした。「見よ、わたしは新しいことを行う。今、それが芽生えている。あなたがたは、それを知らないのか。」という今後を期待させる素晴らしい御言葉でした。そして私たちは、この年に神様はきっと何かの新しいことや進展を見せてくださるに違いないし、しかも、それはもう私たちに分からない所で、もう芽生え初めているのだという期待を胸に教会としてスタートした年でした。



そして、それが実現するかのよう1月には、これから日本への宣教師として派遣されたいと願っているアメリカ人ご家族がいるので、ぜひ太田教会がその宣教師ご家族の受け入れ先教会となっていたきたい、という申し出が突然舞い降りてきました。私たちは「これぞ



神様の導きだ！」と喜び合いました。なぜなら、太田教会は世界宣教を教会の大切な使命と掲げる教会です。太田教会は72年前にアメリカから遣わされた宣

教師によって始められて以降、能吉雄前任牧師も絶えず教会をそのように導いて来られましたし、現在も同じビジョン達成のために日々祈り、主に仕えております。

しかし、同じ時期に世間を騒がしめたのは「新型コロナウイルス」の感染拡大でした。そして、瞬く間に未知のウイルスが日本国内にも広がり、社会の混乱は予想を遥かに超える甚大なものになり始めました。結局この影響によって宣教師ご家族の来日も時期未定の延期となってしまいました。それ以降は他の諸教会と同様に、礼拝出席

者の人数制限、さらに会堂での礼拝中止、そして各自の動画配信による礼拝などと工夫をしながらコロナ対策を強化していきました。主が言われた「新しいことを行う。今、それが芽生えている」というのは私たちにっては、今までに経験したことのない、新型コロナウイルスによる不安や忍耐とそれに対応するための新しい方法の模索、実践だったのです。

しかし、今回の新型コロナウイルスの影響は決して太田教会にとってすべてが負の要因とはなりません。確かに経済的な落ち込みは否めませんでした。感染数が落ち着くと教会での礼拝を再開し、また増えて来ると人数制限などを繰り返しましたが、その間、教会には新しく参加する人々が徐々に増え始め、婦人、青年、赤ちゃんと各年齢層に変化が見られるようになりました。



そして、そのなかからバプテストマの決心する兄弟姉妹も与えられ、バプテストマ式も数回執り行うことができました。そして今年22年には、さらには、さらに



多くの青年が加えられたり、ご家族が集うようになったり、たくさん、たくさん、私たちの赤ちゃんと、たくさご計画は本

と恵みに満ちています。私たちは悪いことばかりが目が行ってしまいがちですが、主はそれの中にあつて希望を与えてくださいます。そして、アメリカからの宣教師ご家族を22年の春に無事にお迎えすることが出来ました。2020年から2年間祈りを重ね、忍耐をさせていただきました、それは教会にとっても、先生方にとっても万全の態勢を整えるために必要な期間だったのです。このように太田教会には新たに宣教師が加わり、さらに9月より1名の神学生の奉仕教会ともなり、主の福音宣教実現のために私たちにできる最善をもって用いられたいと心より願っております。

未だに新型コロナウイルスの影響は社会や教会内にもありますが、太田教会は今日も主によって新しいことが起こり続けています。

連載②

名古屋聖書バプテスト教会国内宣教師 上田 晃

イエス・キリストの恩寵の中で

罪の子

父が戦地に赴いた後、私は新しく来た「おばさん母親」には懐けず、外で遊ぶようになりました。道路に絵を描いたり、近くの旅館の階段を上ったり下りたり、いつも走り回っておりまして。ガキ大将はター坊で、いつも誰かを泣かせては喜んでいました。私も虐められる対象の一人で、よく泣かされました。「やーい！泣き虫、小虫、天まで飛んでいけ」。

ある日、一銭で飴玉を二個買い、一つを舐めていると、ター坊が「なに舐めてんの？おくない？（ちょうだい）」と言って、無理やり私の手から飴を奪い取り、素早く自分の口に入れたの



子どもの時に遊んでいた近くの旅館
現在の様子(京都)

です。そしてター坊は叫んだのです。

「さようは、お山の大将はアキちゃんやー」。その時、私は飴の力を知ったのです。私は飴を買ってはター坊にやり、ター坊を家来にしました。いつの間にか、ガキ大将は私になっていったのです。しかし、飴を毎日買うお金はありません。おばさん母親に、「お金ください」と言うと、「なに買わはんの？」という言葉だけが返ってきます。

ター坊は飴をやらないと、豹変していじめ大将になるのです。その頃から、私は家の貯金箱から、こっそりと一銭また一銭とお金を抜き取るようになりました。貯金箱のお金はみるみる減っていきます。心配になってきました。

ある夜、おばさん母親が、「アキラさん、こんばん、お風呂に行きましょうか。そうそう、貯金箱のお金出して行きましたよ」と言いました。家には風呂があったので、めったに風呂屋には行かないのです。私は全身から血が引いていきました。「箱の貯金箱もって来て」。私は急いで貯金箱を布団の中に隠して、「おかあちゃん。泥棒が持った行ったんや。貯金箱はあらへん！」と、とっさに嘘をついたのです。「泥棒はあんたや！家に泥棒は置いとけまへん。さっさと出ていきよし！」。お

ばさん母親は、鬼のような怖い顔をしていました。私は「かんにんして、もうしません」と言って、大泣きしました。「泣いてもあきまへんで」。あの時まで「おばさん」と言っていたのに、「おかあちゃん」といった自分に驚きましたが、おばさん母親も「おかあちゃん」と言った私に驚いていたようでした。



「この手が！」
と言って、火箸で私の手の甲をバシッ！と打つたのです。今でもあの痛みは忘れられません。あの時、おばさんがお母さんになった瞬間でもありません。もう、ター坊は遊んでくれなくなりまして。ター坊もきつく叱られたようです。

真夜中に天狗が来る

数日して、真夜中のことです。私が寝ている部屋の戸がパチンと音を立てました。何者かが部屋に入っていました。寝ぼけ眼で、うっすら目を開けると、異様なものが立っているのです。白装束に、長い白髪、何か小さなものを頭に付けています。大きな目。鼻の高い顔。聞いたこともない、しわがれ声で、「わしは、鞍馬の天狗。親が

戦地で戦っている時に、お前はなんと悪い子だ。お前を鞍馬山に連れていく！」。こう言うなり、私を掴むと、上に釣り上げたのです。私は恐怖のあまり「ヒヒ！」と、声にならない悲鳴をあげて叫んでいました。「もうしません！もうしません！」。私を下ろすと「次、したときは、空に連れていって落とす」と。言い終わると、部屋から出ていったのです。

私は、夢なのか、なんなのかわからず混乱していました。そのあと、すごい雷が鳴り、雷光がものすごく、部屋の中を一瞬照らしました。雨も降り出し、庭の檜の葉に雨が当たり、恐ろしい音がし始めました。私は恐怖のあまり気を失うほどでした。「悪いことをしたら必ず恐ろしい罰を受けて死ぬ」と、幼心の胸に刻まれたのです。長じて教会に行くようになり、「罪から来る報酬は死です」(ロマ書六章二三節)の御言葉を実感しておりました。

イエス様の福音を知らなかった私は心の深い部分で罪と裁きの恐怖が張り付き、死の恐怖に怯え、正しく生きようと自分に言い聞かせておりました。しかし、そう願っても、盗み以外にもたくさん悪いことをしている自分の罪を知り、苦悶し、無意識下に救いを求めていたのです。当時6歳でした。神は唯一。それでは、この天狗は一体何者？(次号に続く)

